

なお訳文中の注釈は、すべて訳者によるものである。

なお、作者駱賓基の処女作でもあるこの作品の成立過程や、当時の時代背景、思想的な意義などについては、次回以降の解説の中で随時触れてゆくつもりである。

(一九八六年五月九日受理)

を少尉の手の上に置いた。

「……天皇陛下のために死に、大日本帝国のために死ねば、それこそ光栄というもんだ」少尉は、死体を茫然と眺めながらつぶやいた。

「私の息子はいたんですか？」劉大人が嶺から駆けおりてきた。

「バカ野郎！」だんご鼻の兵隊が銃床で彼を叩いた。

「だいぶ逃げたな」広平少尉が未練がましく国境を眺めて言った。

旗を捧げる歩兵が、苦力たちの死体の山に足をとられ、踏みつけた頭の血が隊旗にくっついてしまった。

「帰営！」

曹長が兵隊を召集し、軽機関銃を乗せた馬の背に「平喜多二」の死体も積んだ。

「俺に土地を売らんか？ 高い値で買ってやるぜ。今度は討伐報奨金が出るからなッ……」李特務はするそうに笑った。

「それじゃあ息子は？」劉大人はがっくりして眉を寄せた。

夜が荒れ果てた大地をおおいつくし、風が乾いた気流を送りこみ、谷間はふたたび静けさをとり戻した。

遠くから伝わってくる野犬の鳴き声が、凄絶な音色を運び、飢えた狼たちのうめき声が大空の物悲しい雁の声と響きあった。

山澗、溪谷、清流、……「土字碑」は、人間たちの繰り広げる惨劇に、黙って哀悼を示していた。

(続く)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ 解 説

作者の駱賓基（ルオビンチー）（一九一七年～）については、すでに『人文』第七号（一九八三年七月）所収の拙訳「生活の意義」の解説の中で、簡単に紹介したことがある。なおより詳細なものとして、西野広祥氏「駱賓基創作年譜——駱賓基研究資料——」（『日吉紀要』言語・文化・コミュニケーション）第一号、一九八五年、慶応大学）が最近発表されたので、参照されたい。

「辺陲線上」について。作品全体の構成については、上篇（十四章）下篇（十八章）からなり、今回翻訳したのは全体の約五分の一の分量にあたる。半年間隔で刊行される本学の『紀要』と『人文』に逐次掲載し、あと三回で完訳する予定である。

翻訳の底本には、巴金主編、現代長編小説叢書（文化生活出版社）の『辺陲線上』（民国三十一年四月桂一版、民国三十六年三月滬二版の奥付）のコピー本を用いた。

また近年、吉林人民出版社（一九八四年十月）より重版が刊行された。その冒頭の作者の重版自序では、先のテキストの「後記」および奥付の年月日に若干の誤りがあったことを指摘し、訂正している。ちなみに両者のテキストを比較してみると、後者は「重版本」とは称しているものの、作品細部の表現語句に一部推敲を加えている。

翻訳に際しては、前記の文化生活出版社本によったが、部分的にコピーの不鮮明な箇所や翻訳上困難な箇所などについては、重版本を参照した。

飛び出した。

「進め！」命令を下し、兵隊たちを前進させると、続いて低い声で言った。「機関銃隊は林の中に隠れろ！」

銃はすべて着剣され、それが包囲陣を形成して朝鮮人苦力たちを中に閉じ込めた。

「何をしておったんだ？」広平少尉が歩み寄ってきた。「紅党か？」

「はっきりは分かりませんが……こいつら、どうも砂金を掘っていたようです」李特務は銃を収めた。

「奴らにちよつと聞いてくれ。国境まで砂金掘りにきて……紅党が怖くないのか？」

「わしら……貧乏苦力じゃ……」多くの雑音が入り混じった。

「お前たち……」

「もうそれ以上言わんでもよい」少尉は李特務の言葉をさえぎった。「紅党じゃなけりゃあ、残留家族にちがいない。あの慌てぶりからも分かる」少尉は望遠鏡をつかんでソ連領内をのぞいた。

「早く人数をかぞえて丘の下につれてゆけ」彼は鏡筒を置いた。

なすすべを知らない苦力たちは、両手を垂れて互いに驚きと恐怖の混じった目で見つめあった。日本兵の指揮のもとで、彼らはまるで死のうとしている蛇のように、長く曲がりくねった隊列を作った。

李特務は傲慢そうに点検した。一人一人の肩先を注視し、その数える人さし指はほとんど苦力たちの鼻の頭に触れんばかりであった。

「四十三人！」

「下につれていって、楽に成仏させてやれ！」広平少尉が手を振った。苦力たちには、この残酷な日本語の意味が分からなかった。彼らは綿羊の群れの如くおとなしかった。それも物言わぬ綿羊のように……

「ピシッ……ピシッ……」ソ連国境から、突然銃弾が飛んできた。

「ふせろ！」少尉がとびあがらばかりに驚いて叫んだ。

「アイグー（わあッ）！」朝鮮人たちはソ連領内に向かって、我先にと逃げ出した。

「ピシッピシッ……」草むらに伏せていた日本兵も、射撃を開始した。射撃兵が広平少尉の指揮刀に従って機関銃を撃ちはじめた。

「アイグー（わあッ）！」苦力の群れの中で、何人かが転がり倒れた。

咆哮にも似た悲惨な叫び声が、山の奥深くまで響きわたり、銃弾が烟雾の中を飛び交った。その音は、まるで互いに励まし促すかのように谷間にこだました。

「うッ……」

李特務の近くの歩兵が、体をあおむけにして倒れた。

しばらくして正面が沈黙した。広平少尉は指揮刀を振り、兵隊たちはゆっくりと後退した。二人の兵隊が、死体を運んできた。

「誰だ？」

曹長が、死体の上着のボタンをひきちぎり、襟についている銅製の認識票をはがした。それには「平喜多二」と刻まれていた。曹長はこの認識票

ますように！ 無事に・・・。

彼は「天皇」に対する自分の貢献度を過大に見積もっていた。あの「紅党」をひとつとらえたあかつきには、莫大な報奨金を手に入れることができる。それが彼の最大の願いであった。そのことで広平少尉の信頼をかけることができるのもうれしい。彼は、朝鮮人軍属の中で最も骨惜しみせぬ、精力的な人間の一人であった。

一つの山の斜面を越え、また次の斜面を、・・・彼は溪流の側にいる人の群れを発見し、自分の幸運を喜んだ。

——何と、あれは砂金掘りの連中だ！ 朝鮮人苦力たちだ！

彼はさっきまでの不安を、自嘲しながら打ち消した。そして後ろを振り返り、嶺の下にひそんでいる日本軍の方をチラッと見た。

「アジョシ、スゴハシムニダ（おじさん、ご苦労さんですね）！」彼は近くまで来ると朝鮮語で挨拶した。

「ああ！ こんにちは・・・どこから来なすった？」一人の老人が驚いて尋ねた。

他の連中は、箕を手の中で振っているところであった。鋤で砂を掘る連中も手をとめ、あつけにとられたように李特務の方を眺めた。

「あんたたちに教えてやろうか。日本軍がすぐそこまで来ているぜ」彼は無意識に両手を上げ、自分は何ももっていないことを示した。彼はみんなの顔を窺い、このおいばれたたちが自分にさからうことなどありえないと判断した。もっとも彼自身はと言えば、一撃でのびてしまうようなや、さ男、

であったのだが。

次の瞬間、彼は突然短銃をひきぬくや、顔の笑いを消した。

「動くな！」威嚇する太い声であった。

彼は慎重に二、三步退き、銃口を群れの方に向けた。

「両手をあげる！ もっと高くあげろ！・・・離れて立て。早くしろ！」彼のゆっくりした語調が、かえって陰險なものを感じさせた。

老人たち、子供たち、女たちは、渦中で救いを求めるかのように、両手をまっすぐ上にあげた。彼らは一様に驚きで目を見開き、その視線を李特務の顔の上に集中した。

「ちよつと・・・」

「黙れ！」

彼はこういう場合、どう振る舞うのかを知っていた。相変わず真剣に、左右、とりわけ彼のすぐ近くの連中に目を配った。彼らのちよつとした動作、たとえば痒い所をかくといったような動作に対しても、防御の姿勢を崩さなかった。・・・そして次の瞬間、彼はサッと第二の短銃を取り出した。右手の銃は人々に向けたままである。

「動くな！ 動くなよ！・・・」彼はしきりに目をキョロキョロさせた。極度に緊迫した時間が流れた。

「パン！ パン！」左手の指が引き金をひき、斜め上空に向かって銃声が二発響いた。

進撃の合図だった。銃声は谷間に響きわたり、広平少尉が匍匐姿勢から

広平少尉は静かに望遠鏡をもちあげ、何も言わずに茫然と眺めていた。

「奴ら、この嶺を越えていつちまったんです」劉大人が少尉を一瞥した。

「嶺の上まで行こう」少尉は遠くが見渡せないようであった。

兵隊たちは私語を止めた。馬はずっと下草をかみちぎっては食べていた。嶺を登りはじめるとザクザクという軍靴の音に、馬のひずめが石を踏み碎く乾いた音が混ざりあった。

広平少尉が真つ先に頂上に立った。彼の茶褐色の顔は、秋霜のように厳しかった。望遠鏡でのぞくと、錯綜した山なみが多くの谷間と直角に交わり、果てしなくのびていた。あたりには虫たちの鳴き声が蕩然と広がり、鳥が一、二羽彼方へゆつくり飛び去っていった。

——ソ連との国境か——少尉はためらいながらつぶやいた。

二百メートルほど離れた嶺の端に、「土字碑」が立っていた。彼は望遠鏡のひもをブラブラさせながら、遠くから近くへと焦点を移した。

うごめいていた人の群れが、次第にその輪郭をあらわにしはじめた。静かな溪流が、人の群れを囲むようにして流れていた。川の水面は、キラキラと銀のメッキの帯のように光りを反射させていた。少尉の体内の血は急速にふくれはじめたが、茶褐色の顔にはまだ何の表情も浮かんでこなかった。彼は唇をかみしめ、黙って振り返った。

「国境のあの河原を、ちょっと偵察してこい！」彼は李特務をにらみつけ命令した。

「はい！」李特務は敬礼するや、劉大人の方をずるそうな目つきで振り

返った。そして中腰の姿勢をとりながら、ナツツバキの林の中に消えていった。

「山の隅を包囲しながら、散開しつつ攻撃する！……向こう側がソ連だということを忘れるな！」広平少尉が命令を下した。

冷水を浴びせられたように、兵隊たちはみんな思わず武者ぶるいした。曹長が興奮を抑えきれないように甲高い声で号令をかけると、隊列はすばやく散開した。

「むやみに動くなよ。このナツツバキの林の中で待っておれ。馬をよく見張っている！」李特務が走りだしながら、劉大人に言った。

劉大人は、破れ傷んだその服装から朝鮮人苦力（人夫）だと思われているのである。

「わしの息子が……気をつけて下さいな」大人は一声かけて地面にしゃがみこんだ。

日本兵たちは機関銃をおろし、馬たちはすでに汗みどろであった。一人のだんご鼻の兵隊が、木の枝に馬たちをつないだ。

「しっかり見張っている！」だんご鼻が、李特務の口ぶりをまねていった。

李は、「土字碑」のある嶺の方へ駆け出し、迷茫としてわけ入っていた。彼にはまったく人影が見えなかったのであるが、それが命令なのである。彼はまるで夜叉になって走っているような気分になり、慎重に足にからみつく草をとり除いた。そして心の中で祈るのであった——無事に帰れ

兵營の周囲は、高いツバキの木で取り囲まれ、その上に鉄条網が張りめぐらされていた。兵營の北隅には砂の入った麻袋が馬蹄形にたくさん積まれ、太い木で作られたアーチ形の門を内側から押さえていた。防御壘はなほだ簡単で、監視兵が身を隠せる場所は一箇所しかなかった。その馬蹄形の円弧の内側で、監視兵が所在なげにしていた。時々山頂や天空を凝視していたかと思えば、頭を垂れてぼんやりと徘徊していたり、という具合に。

頭上の流雲は次第に厚くなり、濃い灰色からすでに黒色に変わっていた。大氣の流れも一段と強まり、乾燥した熱氣が襲いかかってきた。

討伐派遣部隊はすでに旗をひらめかせて出発しはじめていた。警備兵が緊張して銃を捧げて敬礼していると、広平少尉の「赤雄」がサッと通り過ぎた。

広平少尉は少壮の軍人で、顔一面に黒い髭を生やしていたが、本当はまだ三十歳である。それが血筋なのか、あるいは寒い土地に生まれ育ったためなのかは知らないが、彼の髭はとにかくよく発達していた。赤い太い布が軍帽に巻かれ、その下に茶褐色の顔があつた。黒い皮の長靴が膝頭まで入り、踵の部分には銀色の拍車がついていた。彼の目の前には隊列が展開していた。

隊列の先頭を劉大人が歩いていた。彼は頭を垂れ、考えていた。

——劉強は逃げただろうな？ それともひょっとして、あいつらに連れ戻されたのだろうか？・・・考えれば考えるほど恐ろしくなり、アヘン中

毒の彼の頭は一層重苦しくなった。彼は内心びくびくしながら、道の分岐点にくるたびにあたりを見回した。できるだけ記憶に忠実に、どの林を抜け、どの窪地を迂回したかを思いだそうとした。

後ろに続く兵隊たちは、道が狭いため二人一列になって進んだ。彼らが背負っている背囊、ニッケル製ポット、・・・銃剣入れなどが、行軍にしたがって雑多な音をたてた。粗末な軍靴は重く、つい足に力が入るのであった。

歩兵の次には、馬を連れた輜重隊が続き、軽機関銃や重機関銃などの部品を積んでいた。一頭毎に射撃兵がつき、人馬一体となって肅々と潜行していた。

一つの丘の前で、劉大人が足を止めた。彼はゆっくりと周囲を見回し、ここが間違いなく危機一髪だったあの場所だと断定した。そして丘のふもとを見回しドキドキした。

「ここが奴らから逃げ出した場所です」彼は嶺の方を指さして言った。「あの嶺から転がり落ちましたんで」

李特務が日本語になおした。すると曹長が力づくよく停止の命令を発した。兵隊たちは止まり、馬も歩みを止めた。

広平少尉が「赤雄」を駆って付近を探索した。

「なぜここでお前らを殺らなかつたんだ？」李特務が質問をとりついで。「分かりません」劉大人が訴えた。「二年前は、奴ら、けちなゴロツキだったんです」

双方の高い呼び声が山にこだまし、深夜の静寂を突き破った。

清らかな月の光が、雲の隙間から銀色の輝きを見せた。山の稜線が限りなく遙か向こうまでのびている。ひんやりした草むらが広い草の海を形成し、冷たい風が吹きわたると規則正しく波紋をまきおこすのがはつきりと分かった。四人はついに捕虜を見つけだせずに終わった。どの顔も落胆の色を浮かべ、嶺のふもとで一同はうずくまった。

金は他の仲間に手を振った。静寂の中に何か物音が聞こえないかと思っただからだ。

劉大人は草の間に頭を埋めていた。彼は金の荒々しい皮靴の音に気づき、息をひたすら押し殺した。草の葉っぱが顔を刺し、痒みと湿りを覚えさせたが、それでも彼は動かなかった。たとえ甲虫が首筋に止まったとしても、彼は死体のように耐え忍んだに違いない。

東方の山の彩雲が、青白色から淡黄色に変わる頃、月や星の残光も徐々に天空に溶けてゆき、やがて消えていった。

「オプソヨ（いない）・・・」金は遠くを一瞥した。そして四人はゆっくりと去った。

「おおッ！ おてんと様よ！」劉大人がつぶやいた。

彼は草むらから顔を出し、四人が嶺を越えてゆくのをじっと見送った。

（第5章）

「よろしい！ お前がはつきり道を教えることができれば、我々は午後

にでも早速出発しよう。広平少尉はすでに許可を与えて下さった」李特務は通訳して劉大人に聞かせた。

「ありがとうございます・・・」劉大人は固くなって口を歪めた。「奴らは本物の高麗紅党（朝鮮共産党系の抗日軍）です。ぜひ道案内させていだきたいのです」

「我々が沙坨子鎮シャツォンにゆくのは匪賊討伐のためだ。安心しろ。お前の息子はだいじょうぶだ」李特務はするそうにほほえんだ。

中庭に昼食のラッパが鳴り響いた。

日本兵たちが食堂に殺到した。討伐の時に特別に配給される上等の肉、卵のスープ・・・などが幾列にも食卓に並べられた。兵隊たちはビールを飲み、互いに出発前の気楽な話題に興じていた。

朝鮮人の馬丁が厩の中で、軍馬の世話をしていた。草に高粱をまぜ、その上におからをまくのである。六、七頭の日本産の馬が、長い耳をピクピクさせ敏感そうな口で餌をよりわけていた。中でも「赤雄」という古めかしい名の馬は、全身これ繊細な黒毛で覆われ、始終ひずめを蹴りたてては、兵営全体をゆるがさんばかりの声でいなないていた。

この兵営には以前満州国の国境監視隊が駐屯していたのであるが、今では日本軍にとって代わられていた。

二十数間の部屋が、今でも同様にひっそりとたたずんでいるものの、その主人は赤い肩章をつけた日本軍になっていた。広平少尉の執務室は、厩に近い南向きの部屋であった。

をささげるのにも似た、悲痛な調子で言った。

彼は顔を嶺の方に向け、すぐ言葉が続けた。

「お前は・・・黙ってる」

劉強は全身の血がにわかに沸きたち揺れ動くのを感じた。肺が広がり、

あえぎが次第に切迫してきたが、彼はそれをむりに抑えて平然を装った。

背中の銃器が、これ以上ないほどの重量で肩にくいこみ、まるで手足の皮が剥がれるのではないかと思われるほどだった。彼はよじ登りながら考えた。

——どうして銃をおろさないのだろうか？ しかも両手を縛ったままだ。

・・・もしこの何丁かの銃が俺の手に入ったなら・・・葦子溝かどこかへすぐにでも逃げるつもりなんだが・・・。

「うッ！ うッ！・・・」朝鮮人の老人があえぎながら登っていた。彼は

劉大人のぼやきにもまったくとりあわず、自信ありげにニヤリと笑った。

——中国人が祈禱しているぞ。おてんと様に祈禱しているぞ。

「頂上までいったら・・・下に転がるのだ！・・・助かるかどうかの分

かれ目だ」劉大人は、朝鮮人の老人のあえぎにかぶせて言った。

付近は次第に暗さを増し、チガヤとナツツバキとの区別もできないようになった。天空の星屑が、流れる雲の後ろへ蒼茫として隠れていった。微

風がそよぎ、木々の葉っぱがサラサラと揺れ渡った。

「急げ！」劉大人が突然躍り上がると、意外な強さで縄をほどいた。足
ル震えていた。そしてすぐに駆け出すや、転がるように道を降り

ていった。

劉強も猛然と駆け出し、ついでに朝鮮人の老人を突き倒していった。

「アイグー（ああッ）！」老人も転がり落ちた。

あたかも放り投げられた三つの球のように、三人は競争して転がり、急速に勢いをつけて滑り落ちていった。

劉強は、途中で止まってあの老人を足蹴にしてやろうと何度も思ったが、滑り落ちるのが余りに早かったので、一瞬の停止もかなわなかった。

結局彼は、粗いヨモギの枝にすがり、辛うじて止まることができた。その上おあつらえ向きなことに、ちょうど朝鮮人の老人を足で蹴りとばすこともできた。すでに手を縛っていた麻縄はほどけていた。

老人は一撃を受け、前以上に勢いよく転がり落ちていった。彼は草の茎か何か太い枝のようなものにつかまろうとしてもがいていた。頬を石ですりむき、必死になって草むらの中で自分の体を止めながら、急に気付いたように疾呼しはじめた。

「ムスケ（どうした）？」嶺の向こう側から高い声が返ってきた。

劉強は膝をついたまま起きあがった。背中の銃器が、傾いて横にずれてしまった。彼は何とかそれを振りほどこうとしたが、だめだった。

彼は不恰好なまま駆け出した。裸足のことも、父親のことも、すべて忘れて・・・彼にはただ一筋の道があるだけであった。待ち望んでいた葦子溝への道が。

「ムスケ（どうした）？」金が草むらに沿って降りてきた。

見回した。

一つの林を黙々と通り過ぎると、遠くから狼の啼き声が聞こえてきた。真夜中の深々たる底冷えが彼の心の内側まで滲みこんできた。

「早く歩け！」父親が銃床でこずかれるのが見えた。

劉大人は身震いをした。そしてあごをしっかりと引き、骨が折れるほどの痛みをこらえた。彼ができるだけ早く歩こうとしても、分厚い綿靴は夜露を一杯に吸って、重たく感じられた。彼は自分の過去の愚かさを、自分の過去の酷薄さを、いたく反省しているように見えた。

——金の奴は手傷を負った虎だ。わしも今度は助かるまい……。

彼は奪われた地券を思い出し、心がまた乱れた。だが、それ以上考えるのはやめ、目の前の道に自分の注意を向けた。

「とまれ！」縄が力一杯引かれたため、劉大人の手首に刀で鋭く切りつけられたような痛みが走った。

彼は立ち止まって劉強を一瞥した。劉強は命令を待つかのように、上目使いで父親をそつと見た。背後の朝鮮人たちが簡単な合図を交わしたかと思うと、劉強の背中に荷物のようなものを乗せた。

「パリ、カセヨ（早く来い）！」三人の朝鮮人が、彼の側をサツと駆け抜けていった。彼らは振り向きもせず、何も持たずにズンズン前に進んだ。劉強も歩みを早めたが、草むらの中にはえていたハマビシをうっかり踏みつけ、とげが足にささった。彼はあえぎながら傷ついた方の足を持ち上げ、びっこを引きつつ前に進んだ。

背後の縄を持つ人間が交代した。今度の男は終始咳をし、そのうえ年寄りじみた重いあえぎを洩らした。

男は話もせず、催促もせず、ザッザツと後ろからついてきた。

劉強が、微妙にあごを少し傾け視線を走らせると、銃床にぶつかった。彼は自分が背負っているのが銃であるのを知って、急に胸が騒ぎだすのを押しとどめることができなかった。

月の光は雲にさえぎられ、あたりは黒々とした闇であった。伸び放題の草むらは、足で踏みつけられてもまたしぶとく立ち上がった。露が腰の回りを濡らし、時々その飛沫が鼻先をかすめた。わけでも劉大人の袍子（上衣）は、水を多く含んで重かった。

彼はボンヤリと前方を見つめていた。三人の朝鮮人が嶺をよじ登っていた。

その嶺はまるで鯨の背中のように地肌がむきだしになり、細く長く続いていて、嶺の頂きまで登りつめた三人は、ちよつと俯瞰していたかと思うと消えてしまった。

劉大人は、左側に目を向けて言った。

「わしの……靴が脱げた」彼は思い切って首を回した。

「中国語……分からない……」後ろの老人が言った。

劉大人は、嶺の上にたどりついた時のことを考えると、緊張で胸がしめつけられる思いであった。

「劉強……嶺の上についた時に……やられるぞ」彼は、牧師が祈禱

「へいッ！」突然一人の見知らぬ男が闖入してきた。静謐な水面に大きな石の塊が投げ入れられたように、劉強は思わずドキッとした。そして驚きの余り、思わず両手を上にあげてしまった。

「アイグー（あぁッ）！」朴爺の嫁も朝鮮語で鋭く叫びながら両手をあげた。

もう一人、やはり見知らぬ男が入ってきて、劉強の胸先にキラキラ光る銃剣をつきつけた。男の鋭い目つきは冷たい光りを放ち、人をゾッとさせるような凄味を含んでいた。劉強は震えながら目を閉じた。

「お、ま、え、の・・・」一語一語がまだるっこく話されたが、すぐ止まった。彼はもう一人の仲間に目くばせした。

「イブン、イラオオプソヨ（おい、こわがるな）」銃を持った方が、朴爺に朝鮮語で話かけた。それから銃を劉強の胸の前に移し、銃剣を持っている仲間と交代した。仲間はすばやく劉強を後ろ手に縛りだした。

「イブン（同胞よ）・・・」朴爺は憐れみを求めた。

「パリ、カセヨ（早く来い）！」戸外から切迫した朝鮮語が聞こえた。

「パリ（早く）・・・」劉強は慌ただしくオンドルからひきずりおろされた。

「俺は・・・」だが、舌がもつれて喉を塞ぎ、そのうえ頬に平手打ちが鳴った。

「パリ、カセヨ（早く来い）！」もう一人縛られている人間が、首の後ろを殴られていた。

劉強はもつと驚いた。それは父親だった。劉大人は抵抗しようとしていたが、所詮はむだであつた。彼も両手を後ろで縛られていたのであつた。

「おやじ・・・」今度は左の頬を一発張られ、劉強は頭の中が炸裂するようなめまいを覚えた。

「金よ、わしは・・・」劉大人が悲痛な声を出した。

「おい！ おまえには死んでもらうぜ」金と呼ばれた男は、さらに一撃を加えた。

「早く出ろ！ ここでは都合が悪いんだ。長い間俺たちからしぼり取ってきたが、今度は俺たちがお礼させてもらうぜ」

劉大人は力をふりしぼって歩きだした。体中の関節が弾力を失い、震えが間断なく彼を襲った。かたわらの劉強は頭を垂れたままだつた。後ろでは男が縄をつないでいた。

荒野の草むらには露があり、ズボンの中まで滲みこんでは、ひどい寒さと震えをもたらした。一行は虫の鳴き声を踏みつけながら、平原を横切っていた。

劉強には方角が分からなくなっていた。まわりの何本かの白樺の木を通り抜けると、草原は次第に狭くなっていった。草むらの中で裸足をひきずって歩いていると、まるで何か残酷な刑罰を受けているような錯覚に陥った。尖った小石や下草のとげが足にくいこんだ。しかしこれらの痛みは、すぐに恐怖心にとつて代わられた。そして次にやってきたのは痺れだった。さっきの目まいは次第に収まり、彼は森閑としている周囲の空間をじっと

仕事を続けていた。食器が水をはねあげては、ポトポト音を立てていたが、それが劉強のいらだちを一層かきたてるのであった。まるで新入りの囚人のように彼はしきりに焦っていた。

屋内に乱雑に置かれた農機具が、なにか変に彼を圧迫していた。

オンドルの向かい側には、二本の木で支えられた牛槽が置いてあった。

背後の物音がひどく静かになった。彼は頭をまっすぐに上げ、るいれき（リンパ腺結核）にかかった患者のようにピクリとも動かなかった。

皿ほどもある大きな糞が螺旋状に転がり、ちぎれた青草といっしょくたに乱雑に壁の隅に集められていた。その上の板の棚には、欠けた木製の器がいくつも置かれていた。

それらすべてが、劉強に妙にチグハグな印象を与えた。やぶ蚊が勢いよく唸りだし、時に彼の鼻先まで迫ってきたので、彼はいらだたしげに両手を振った。そして、怒ったように体を起こすと素足を組み直し、嫁の方をチラッと見た。

彼女はもう食器を洗い終え、黒い裙子（スカート）で濡れた手をふき、裸足のまま外へ駆け出していった。そしてまもなくすると、牛を中に引っぱってきて、牛槽の後ろにつないだ。彼女はこれで一日の仕事が終わったというように、頭を上げて竈の隅にポツンと坐った。

家の外から話声がもれ聞こえてきた。朴爺親子が帰ってきたのである。ザッザッという足音の中に朝鮮語が混じっていた。

二人は青草を背負い、手には鎌を握っていた。鎌の柄のところには夜露

がびっしりかかっていた。

「ぼっちゃんはまだ寝なさらんのかね？ 大人はどこにゆかれたんで？」 朴爺がいつものようにニヤニヤしながら聞いた。

「鄭のおじさんの所へいったよ」劉強も無理に笑いを作って答えた。

朴爺は青草を牛槽の横に放り出し、それが習慣であるように肩をすばめると、青草の屑が舞い落ちた。そして麻の帽子をとると髪を少しかきあげ、火鉢をまたいだ。息子が牛槽の中に青草を入れた。

家の中にしばし静寂が訪れた。聞こえてくるのは、牛のガツガツと草を食む粗い音だけだった。牛は、背や腹を無意識にブルブル震わせ蚊を追いつめた。尻尾をぶらつかせながら、至極気持ちよさそうであった。

「牛代も払えず・・・食い物も足らねえ」朴爺が長いキセルをくわえながら言った。「だが、大人の面子もたてんとなあ」

「分からねえのか？」息子が言った。「どうしようもないんだよ。ケシを収穫して食い物に換えるのかい？ 大人に話してみなよ。収穫の返済、地租、牛代・・・ああッ！」

劉強は困惑した。二人の飢えた鷹のような目に射すくめられ、彼はおびえのようなものを感じたが、彼らを慰める適当な言葉も見つからなかった。「・・・おやじは・・・話が分からない人間なんだ・・・」彼は、もうしわけなさそうな調子で口ごもりながら言った

朴爺は失望の色も見せずに、相変わらずニヤニヤ笑いながら、次に何かいい話が出てくるのを待っているようであった。

「朴爺！ 鄭チョンのおやじはどこだ？」劉大人がまた牛車に乗った。

「小屋じゃないんで？」朴爺が煙草を巻いた。

「ちがう！」

劉強は父親を一瞥し、またうつむいた。彼には父親の言葉の意味が分からなかった。

彼は、黙って牛車の後ろについて歩いた。

鄭のおやじの家は彼らの家と隣接していた。二つの草ぶきの大きな家が砂原の前に建っていた。牛車を止めると、劉大人は慣れた調子で前に進んだ。

「ありや？ どうしてお越しになったんで？」中年の男が、すっとんきような声で笑って言った。

「・・・もうすぐ城内に攻撃がある。疎開のついでに地租を徴収しにきたんだ」劉大人はそう述べて、言葉を続けた。「来い、劉強・・・こちらが鄭のおじさんだ」

「・・・中におはいりなされ」

「朴爺！ 早く牛車を片づけろ。今夜はここに泊まるぞ」劉大人は振り返って命令した。

夜の色が大地をおおいつくし、山谷の叢林には淒涼な叫び声が響きわたった。

(第四章)

涼しい夜の訪れが、虫たちの鳴き声を誘い出した。草むらや荒野では、空間一杯に蛙の騒々しい声がこだましていた。その音色は単調で雑然としていたが、中にはおけらの震えるような吟声が、灼熱の中を吹き抜ける一陣の風のごとくさわやかに混じっていた。

今夜はちょうど劉強が番人小屋にきて三晩目である。

彼は暇そうにオンドルの上に寝そべり、心を落ち着けながら、これから自分の行動計画を立てていた。

——何がなんでも行かねばならないぞ。家庭の情愛も俺の心まで束縛できないはずだ。崇高な民族革命は自分の呼吸作用と同じくらい大切に不可欠なものだ・・・みんな誰もがこの巨大な奔流に身を投じているというのに、俺は一つの小石となって自分を投げ出すこともできないでいる。行動しないということは、まさに保守体制の一員にほかならないのであるまいか？・・・じゃあ沙坪鎮シャピョンチンへ行くか、あるいは葦子溝チウエイガンか？ 沙坪鎮には同級生たちがいるがちよつと遠すぎる。

彼は、美人の琬玲ワンリンや狡猾な季偉剛チウエイガンを思い浮かべた・・・心のスクリーンに一人一人同級生の輪郭が映しだされた。

——しかし彼らと別れて、すでに二年もたっている。彼らは国家と民族と自身のために、まさに死中に活を求めているのだ！ 劉強は嗟嘆し続けた。

番人小屋の中では、朴爺の息子の嫁が食器を洗っていた。彼女は黙って

「ええ、勿論です。だけど海南の故郷には帰れそうもありませんわい。こんなひどい時期に関東山がどうやってできるんですかい？」彼は言いたいことが一杯あるように見えた。

「畑はまったく荒れ放題なのか？」劉大人が家の中に入った。

「今年はずっと十里も音沙汰なし」というやつで、昨日も親豚を義勇軍のために料理させらればかりで、……まったくいいまいしい」

「あの匪賊の奴らか？」彼の心が一瞬震えた。

「葦子溝^{ウエイツコウ}で地主を襲った奴らです」辮髪^{ウエイツコウ}の周が白湯を差し出した。

劉強は内心愉快的な気持ち^{ウエイツコウ}がした。彼は静かに椅子に坐ったままずっと盗み聞きしていたが、興奮の余りか無意識のうちに両手をたえず揉んでいた。

——もし、本当に義勇軍に参加できるとしたら？……

彼はぼんやりとあたりを見回しながら、心の中に名状しがたい昂りを覚えた。

オンドルは大変広かったが、残念なのは敷物がひどく傷んでいたことだ。竈にはめこまれている大鍋には、汚れたかすが堆積していた。土壁の一隅には水屋が置いてあったが、煙ですっかりいぶられ、真っ黒であった。その上の壁には竈の神様の画像が貼っており、水屋はつまり神棚をも兼ねているのであった。そしてそれ以外にあるものと言えば、部屋^{ウエイツコウ}の隅の野菜と破れた幾枚かの麻袋だけであった。

オンドルの端に坐った劉大人はすでに話もやめ、辮髪^{ウエイツコウ}の周も麵粉をこねはじめた。

朴爺は桶を手にさげ、牛に水を吞ませようとしていた。昼飯を終えると、ふたたび出発となった。

「早くゆくにやあ歩くにかぎる」劉大人は車の後尾についた。

田んぼの緑の苗が、沿道の鮮烈だがひっそりしたケシの花の色彩をひきたてていた。色鮮やかな蝶が、その軽佻さを誇示するかのよう^{ウエイツコウ}に舞っていた。

道はうねうねと大盤嶺を囲みこみ、幾筋もの帯を形作っていた。牛は空になった車を必死で引っ張り上げていた。

後ろの三人は、腰を曲げ嶺をはい登り、まるで引き船のように額をほとんど地面にこすりつけんばかりに体を傾けた。誰の顔からも汗が流れはじめた。

劉大人は自分が衰えたことを改めて思い知らされた。彼は苦痛と疲労に襲われながら足を動かしていた。

——本当に義勇軍に出会うなんてことがあるのか？

考えても答えは見つからなかった。彼は警戒の目で周囲を見回した。樹木が揺れ動くたびに不安な気持ち^{ウエイツコウ}がつのつた。彼は劉強と朴爺をチラッと見た。

——若い奴は防備ということをもまったく知らん！

日差しがヒリヒリするほど熱くなり、深い藍色の大空には幾ひらもの薄い雲が広がっていた。ここちよい微風が疲れをいやしてくれた。

彼らは、無事嶺を越えた。

料用に積み上げられ、中には乾いた柳の枝や茅、蓬などまであった。

道の向こう側から牛車が出てきた。中には、鉄鍋や衣装箱、陶器などの品物が積まれ、車の振動につれて乾いた金属音をたてた。

「城内へゆくのか！・・・バカが！」劉大人は独り言をつぶやいた。

だが向こうの車に坐っている人間は、疑わしげな一瞥を投げかけて、かたわらを通り過ぎ去った。

牛が、悠長な鳴き声をあげた。

「ヘイ！」朴爺は叱るように一鞭くれた。

遠くからも牛の鳴き声が聞こえてきた。朴爺が目を見ると、何人かの朝鮮人の子供たちが牛の世話をしているのが映った。牛は新鮮な水草を選り分けていた。

「大人！ 今年も牛を貸して頂けるんです？」朴爺が振り返った。

「もう一年貸してやろう。ただし去年の貸賃はまだもらってらんぞ」

「すみません。わたしらの食うものもないんで、とても牛の分までは・

・」彼は照れ笑いをしながら、苦しいやりくりを言い訳した。

「見ろ、この牛を。えらく痩せてしまって・・・」劉大人は牛の背をひとさすりした。

「・・・」劉強は朴爺を一瞥した。彼は一言もしゃべらず、また彼らの会話にもほとんど耳を傾けていなかった。

——俺は自分に襲いかかっているこの現実を避けることはできない。自分の若さを梃ヒに、行動を起こす以外にない。

彼はずっと思いつめ、冷静な目の中にある決意をみなぎらせていた。外気が温暖になったのに劉強は気づいて、綿袍を脱いだ。

頭に水瓶をのせた朝鮮人女性が、小道を横切っていった。田野に高くそびえる木製の煙突が、細い煙を吐き出していた。

陽光は明らかに季節が五月であることを示していた。劉強はこの塞外（満州地区）の風光をじつと胸の中で反芻していた。そして悲しみ傷んでいた。——無尽蔵の資源・・・人民の生命線。それらを自分たちは失ってしまった。失ってしまった・・・。

大盤嶺山脈は、ちょうど屏風のように荒野をさえぎり、その巍峨たる尻尾を横たえていた。岩陰にはまだ残雪がはりついていた。

「飯にするぞ。食べ終わったら、しっかり山道を登るんだぞ」劉大人は、銀製の薬入れをさぐって二粒の丸薬を取り出し口に入れた。

「ここで降りてくださいいな」朴爺は小店の前で車を止めた。

「牛にも少しは食べさせてやれ。こき使うばかりじゃ、ますます痩せちまうぞ」劉大人が車を降りたので、劉強もいっしょに地券の入った袋をかかえて降りた。

朴爺は牛を放ち、たずなを前脚に巻きつけて草場の方へ追い立てた。

「おや！ 劉大人、一年ぶりに租税徴収におこしですか」店の主人が驚きながら言った。彼は誠実な老人だった。

「ちょうど一年だ。変わりないかね、辮髪（清の時の髪型。もともとは満州族の風習）の周ナヨよ」

のは、学生や労働者、管理人などであり、中産階級の連中は、疎開のため続々と郊外の郷村に引越した。一方、春耕でちょうど忙しい最中の農民も、紛々と城内へ引越した。それも疎開のためであつた。

H城市は、巨大な恐怖と混乱に支配され、まるで崩壊前夜といった状況にあつた。

劉大人も恐怖と驚愕のなかで、朝鮮人小作人の牛車に乗って、劉強と一緒に山村の番人小屋に落ちのびようとしていた。

真夏の日の出も、この荒涼たる一帯に残っている僅かな寒気を追い払うことができなかった。劉大人は綿袍メンパオ（綿入れ）を着て黒いズボンをはいていたが、ただ帽章だけは赤く輝いていた。

「朴爺パク！ 一服つけてくれんか？」彼は車を引張っている小作人を見下ろした。

「ありますだ」彼はたどたどしい中国語で答え、布袋の中から煙草の葉を取り出し、小さな紙で巻き、それを唾でくつつけた。

「おいらの煙草はピカ一ですぜ」彼は一口吸って火を確かめた。「飯さえ食えりゃあ、おいら凶們江まででもきつと走りますだ。そこにやあ中国の救国軍がたと集まって・・・ほんと、たんとに」彼は説明不足を補うかのように力をこめて言った。

劉大人は黙って煙草を吸っていた。心は迷っていた。

—— 去年の冬はあんなに脅かしよって・・・くそ！ 一粒の年貢も納めずに。今度は絶対にお前らにだまされんぞ。

「おいら何度連中に飯を炊いて食べさせてやったことか！ たんと貸しがありますだ」朴爺は鞭を振り上げ、瘦せこけた牛の背を叩いた。

彼の栄養失調の顔には、何の表情も浮かんでいなかった。白い薄い綿襖メンダウ（綿入れ）は両肩が油で汚れ、朝鮮式の幅広いズボンは裾がまくれ返っている。太陽のマークの入った破れた長靴には細い縄が巻きついているが、それは縄で縛っておかないと必ず長靴が脱げてしまうからである。

彼は鞭の柄を地面に向けて振り回し、牛を威嚇した。牛の後ろに取りつけられた車は屋根がなく、ただ稲わらで編んだ簾が低く垣根のようにめぐらされ、車輪の巻き上げる砂塵を防いでいた。

広大な野原には草の香りが漂いあふれ、人を浮き浮きした陽気な気分にした。タンポポの種が、風にまかせてのんびりと空中をたゆたっていた。一筋の太陽の日差しが、金色の輝きを放ち、地表にはもうもうとした蒸気がたち昇っていた。平坦な道路がずっと遠くまでのびていた。巨大な蟻アリにも似た長い畝の中に、包米（トウモロコシ）、高粱などの穀物の苗が一杯に敷き詰められていた。道端の薄い草むらから鳥が姿を現したかとおもうと、たちまち彼方まで飛び去っていった。閑散とした茅屋が、田野の中にポツンポツンと点在し、ブキリの屋根が光りを反射させ、薄い白い炊事の煙が家々からたなびいていた。裏庭には乾いたわらの山がうず高く積まれている、鳥たちがその山の頂きにやってきては、穀物の粒や昆虫などをあさっていた。鶏も草の茎をひっかき回していた。

キノコ型の草ぶきの家は朝鮮人の住居で、周囲にサンザシなどの木が燃

を伸ばしていた。

「ああ、ひと眠りした……」彼は立ち上がった。

「この半端仕事をひとつ片づけるか。よし。今夜はひと眠りして気持ちさええわ」

「城内に帰るの？ あんちゃん」劉強はあばたが瓜皮帽をかぶるのを見て言った。

「ああ、帰る」あばたが出ていった。

夜の涼風が、体の中の疲れを吹きとばしてくれた。彼は後ろ手にしたまま、堂々たる長身を揺らしながら、ゆつくりと歩いた。

「コラッ！」北門の警備の日本兵が、突然銃口を胸先につきつけた。着装してある銃剣が、彼の心臓の上にピタリと向けられ、脅迫的な光りを帯びていた。

彼は驚き両手を上げた。

「オマエ、名前ハ？」日本兵は慣れない中国語で詰問した。

「私は……」彼の唇が震えた。

「こいつはあばたの王四ワンシーです」満州人の警官が、自分がよく承知していると言わんばかりに口を出した。

「あばたの何だ？——人をからかうなよ！……親日派か？」

「親日……」警官が説明しようとする、

「コラッ！ お前は黙って……」日本兵はちよつと警官を一瞥して言った。

「怪しい者じゃありません。私は『凌雲閣』で……け、經理をやっております」王四はすっかり緊張しきっていた。

「満州国をどう思う？」大きな手が王四の腰のあたりをさぐった。

「大賛成です」

「行け！」

あばたの王四は、振り向きもせず歩き出した。だが心の中では思い続けていた——日没「酉」の刻か……日没……。

一つの角を曲がった所で、黒い闇が彼の姿をつつみ隠してしまった。

(第3章)

「世の中えらいことになるぜ。えらいことに」H城市の人々は、誰も彼もささやきあつた。

「救国軍が関二虎の首を盗み、かわりに挑戦状を投げこんでいった——きつと王大ワンダーがまた攻めてくるぞ」胡同、小道、アヘン窟、どこでもうわさがひそかに流れた。

関東軍派遣隊と満州国警務局の布告は、明らかに効果を失っていた。彼らの思惑とは反対に、流言蜚語が蔓延していたのであるから。

日満協和会の職員は、至るところに標語を貼った。壁、城門、柱……みんな人の注意をひくようなポスターだった。だが、それに見入る人の数は寥々たるものであった。

店をだしている商売人たちは、みんな省都に避難した。店に残っている

二人は肩を並べて大門を出た。

闇夜の裏通りは、静まりかえって虚ろであつた。二人はめんどろな訊問にひっかかるのを避け、曲がりくねった胡同（路地裏）を遠回りした。胡同は狭く暗かった。ゴム底の布靴は軽快に動き、壁の隅の子鼠のようにチユツチュツと音をたてた。

目の前には郊野が広がっていた。遠くの山嶺が、屏風のように渺茫たる風景から浮き出てみえた。深い沈黙があたり一面を支配していた。小道の両側に沿って生えているのは、背の低い樹木だった。

劉強は緊張した心を押し殺し、口許を締めた。彼は冷静さを取り戻し、恐怖心を打ち消した。

「これが例の木だ。見ろ」チビの関が一本の木の幹を軽く叩いた。木の枝の股にひっかかっていた小さな籠が、ブラリと揺れた。

夜空にまき散らされた星は、まるで暗闇の奥深く吸い込まれてゆくように、その光が弱まっていた。劉強は籠の中のものをはっきり見定めることができなかった。おびえに襲われ声も出ず、口の中には苦いものを感じられた。

「俺が木に登るから、お前は穴を掘ってくれ！」チビの関は、大胆さを誇示するかのよう、野猿さながらに木の幹にとりついた。

劉強は鋤を振り上げ、土の表層を掘りはじめた。それは軽快で俊敏だった。

「受ける！」低い叫び声が出たかとおもうと、木の籠が落ちてきた。

「関二虎！・・・お前、救国軍にゆく夜に俺を呼び出して、夜中すぎまでしゃべっていたな」彼は籠に近づいた。友人に対する熱い思いが、それまでの不安にとって代わっていた。

「俺たち中学の仲間、みんなお前と仲がよかった。だからお前が救国軍のなかで、ずいぶん活躍しているって・・・」チビの関が、踵を地面につけた。

「ああッ！」劉強が驚いて声をあげた。「どうして首がないんだ？」

彼は大胆にも籠の隙間から手を入れた。彼は触れた——ちょうど封筒のようなものが縄で籠の中の柱にくくりつけられていた。籠は底が抜けていた。

「ザッ、ザッ」遠くから足音が伝わってきた。

「早く逃げろ！」チビの関が鋤をひたくり、あわてて劉強をひっぱった。

劉強は心残りの一方、恐れおののきながら急いで逃げ出した。

「本当に危なかった！」チビの関が一息ついた。

「あの封筒をもって帰らなかったのは・・・まったく・・・」

「危なかった！だから俺は救国軍にはいつて一生戦おうかと、真剣に考えちまうんだ」

「うん、お前もきつといつか・・・」劉強は話を打ち切り、手を振って家の中に入った。

父親はまだ眠っていた。あの暗紫色のあばた顔の男も、まだ眠たげに腰

ますぜ」

「太陽の昇り沈みなんかで決まるもんか！ どっちみち年寄り子供は海南に疎開させたが、それでもまだ安心できたもんじゃあない」劉大人は、心を落ち着かせようとするかのように目を閉じた。

「そりゃあまずいぜ。おたがい海參威（ウラジオストク）じゃあ長く暮らしてきたはずだろうが。あそこの革命軍と白系ロシア軍の対立は随分とひどかった」あ、ば、たの低いだみ声が流れてきた。

劉強は神経に鳥肌がたつような焦燥を覚え、次第にいらだちはじめた。

心は鉛弾のように重くなり、いいようなない苦痛が襲ってきた。

紙を貼った格子窓が、徐々にぼんやりと薄暗くなってきた。彼はまだ腕を組んだまま物思いにふけていた。

「明かりをつけるのさえ忘れちゃったのか？」父親がジロリとにらんだ。

劉強は黄昏が急に迫ってきたのに始めて気付き、灯油をともした。

「俺、チビの関のところへいつてくる」彼はそう言うなり外へ出た。この時刻になると父親がいつものようにひと眠りしたくなるということを、彼は心得ていた。

「関くん」彼は壁にはまった窓をちよつと叩いた。

「誰？——入ってきな」

「出てこないか？」

言い終わらないうちに、チビの関がすつと出てきた。

「関二虎がやられた」声が低くて聞き取れないほどであった。

「じゃあ、死体は？」劉強が尋ねた。

「処刑場の脇で木に吊るされた」

二人はしばらく沈黙した。劉強の脳裏に、昼間見たあの光景が次々とよみがえってきた。——軍用トラック、日本兵、銃、狂ったようにわめいていた関二虎、……。

「彼を埋めてやらなくちゃあ……本当に偉い奴だった」彼は関二虎の託すような眼差しを思い出しながら、独り言のように話した。

「けど、死体がないんだ」チビの関がちよつとまばたきをした。

「どこへいったんだ？」驚いて尋ねた。

「知るもんか。幽鬼じゃあるまいし」

「首ぐらい埋めてやれるだろ——首ひとつぐらいは」彼は断定的に言った。「この城内に気骨のある人間がいるってことを教えてやるためにも、俺たちはやるべきなんだよ。なッ」

「……」チビの関はためらうように彼をみつめた。

「行こう！」命令するような調子だった。

「鋤をもっていこう！」

二人の間の空気が、一瞬凍りついた。

「よし！……」チビの関が振り向いた。

劉強の心の中に興奮の炎が燃えあがった。それと同時に、名状しがたい不安も神経の末端まで広がり、胸が高鳴り動悸をうちはじめた。

「行こう！」チビの関が暗闇の中で彼の手をしっかりと握った。

つつけた。

くすんだ黄色の明かりが彼の鼻梁を照らしだし、瘦せた猿のような顔——きはだ色で一筋の赤味もさしていない——を際立たせていた。細かい皺が額の前部に刻まれ、尖った口許には薄い八の字のひげが生えていた。

「兄さん！」あばたがキセルの雁首を叩きながら言った。「ご存じでしょうが、あの劉子章^{リュウシチャン}って野郎は相当な奴ですよ。みんなを連れ出して一年余りで城内へ攻め込んでくるんですから」

彼は頭をかいてキセルを換えた。

「天意だ。何も彼もみんな天意なんだ……決まっているものは動かせん」

劉大人は横目でジロリとにらんだ。

「劉強！ 俺に茶をくれ」暗紫色のあばたが言った。

劉強は木で作った鶏のようにボンヤリしたまま、オンドルの下に突っ立っていた。彼は返事もせずに黙ったまま茶を差し出した。そして木の椅子に坐った。表面はあくまで冷静に見えたが、内心はまるでコレラにでもかかったように、しきりにうなされていた。

机の上には布包みが置かれていた。その中に地券や小作契約書が入っているのを、彼は知っていた。……そして地面には反故紙が散乱していた。それらが彼の気持ちをいっそうかき乱した。

——豚殺しの関二虎だって、祖国を救うということを知っているのだ。しかし俺は？……俺はこのまま親の庇護のもとで生き続けるのか？ 俺

は……逃避しているんだ。

彼はまた、県の中学校——それは一年前に潰れて、今は特務機関の事務所にかわっていたが——の同級生のことを思い出した。

その同級生は、腕を胸の前で組み合わせ、頭を壁にくっつけて、泥塑の神像のように一点をじつとにらみつけたまま、微動だにせず坐っていた。

同級生たちはみんな救国軍に入ってしまったのに、ただ俺だけが、……俺一人だけが……。

「間抜け！ 臆病者！」ついに彼は自分を罵った。

淡い白い煙が、オンドルの上から漂い流れてきた。人を誘い込むようなあの独特の香りが、たちまち鼻を衝く。彼は厚い唇をかみしめながら黙想に浸っていた。

オンドルの上から話声が流れてきた。

「今年はひどく荒れることはないですよ……日本も今年はきっとダメですぜ」あばたが理屈を並べ立てた。「推背図（歴代の興亡を予言した唐代の書物）なんか読まなくっても、天干地支説から考えれば、甲午の年に中国は日本と戦ったが（日清戦争を指す）、あの時の“午”は太陽の最も盛んな時刻を指すから、勝てるはずがなかったんだ」

「じゃあ今年はどうしてそうなるんだ？」劉大人が煙を吐き出して言った。

「今年はちょうど逆転するんですよ。癸酉の“酉”とは、西に沈む時刻を指しますからね」そして声を一段と高めて言った。「日本はきつと負け

火薬の残臭と血の生臭さは、すでに消えかかっていた。家々の屋根のてっぺんには、鳩が群れをなし飛び回っていた。

カーキ色の軍用トラックが北門から疾走してきた。車の四隅に坐っている日本兵たちは、銃剣を着装した小銃を周囲に向けていた。顔はひきつって緊張していた。その中に一人坐っていた関二虎は、顔がすっかり腫れあがっていた。青、紫、・・・その色とりどりのあざは、画家のパレットとほとんど変わらないくらいだ。彼は持ち前のかんしゃくを爆発させて、ずっと罵り続けていた。

「くそつたれめが！ おいらは屠殺の名人なんだぜ。・・・それもお前から日本人の豚どもが専門だ！」

「バシッ！」

彼の右の頬にまた赤いあざが加わった。

通りに面した商店の中から、人々がうかがうようにそれを見ていた。珍しく激しい音が道に流れたからである。

関二虎は怒り狂いわめきながらも、一方で誰か見知った人間がいなかったのか捜していた。もちろん見物の人々の方は、彼が屠殺場の若者で、ちょうど一年前に城内から失踪したのをみんな知っていたのであるが。

「ええいッ！ もうたくさんだ。棺桶を用意してくれ！」彼は罵り続けた。彼のむさぼるような黒い瞳が、人々の後ろで半ば身を隠していた劉強^{リュウチアン}をジロリとにらんだ。

劉強は思わずギクツとして、疾走してゆくトラックの方へは二度と目を

やらなかつた。彼は一年前まで、関二虎を見知っているどころではなかつたのである。

——あいつが？ 彼は驚きいぶかしんだ。

関二虎ののっぺりした顔、だんご鼻、濃い眉と目、それらの表情から劉強は彼の苦痛が手にとるように分かった。まるで氷の塊が喉を通り過ぎるような戦慄を覚えた。そして次には悲しみがこみあげてきた。

劉強は頭を低くたれ、ぼんやりとしながら家に帰った。

「おいら関二虎を見たよ！」彼の声には悲痛な調子が混じっていた。「今日連れていかれたよ」

「烟泡^{エンパオ}（アヘンを溶かして丸い塊にしたもの）をとってくれないか？」父親は関心なさそうに彼をチラッと見た。

劉強は烟泡を差し出し黙りこくった。彼は、父親が自分だけの世界に浸っていて、それ以外にはまったく気がないのを悟らされた。

「昨日つかまったのが関二虎でしたか」暗紫色のあばた顔の男が、父親の真向かいで横になっていた。

「奴でなけりゃあ誰だ？ 二虎といえばあいつ一人だけだ」父親は烟泡をあぶりながら言った。「去年お前の姪子を洗脳して、救国軍にひっぱりこもうとしていたが、・・・あいつがむちゃをしでかすことは、とつくに分かっていたんだ！」

父親は頭をおこして、ペツと痰を吐いた。もうそのことは話したくないという身振りなのである。骨ばった両手が、慣れた動きでキセルに烟泡をく

た。

彼は必死になって身体を移動させ、震えながら肩の下に銃床をはさんだ。

——俺たちの国を滅ぼし、俺たち中国人を殺しながら、こいつらは平然とまばたき一つしない連中なのだ。

郎砲手の目には、凶暴な意志が浮かんでいた。あえぎは重くゆるやかになった。彼は力一杯身体を起こし、あぐらを組むように右の膝頭をあげた。そして手の震えをそれで押さえ、足にはさんでいるピストルを少し動かし片目をつぶった。一連のこの動作は、すべて今まで狩猟で行なってきたのと同様、慎重でかつ俊敏に運ばれた。

「ピシッ！」人さし指を動かすや、彼はぐったりと身体を傾けた。鈍い灰色の膜が彼の目の中で凝結した。

「あッ！……」日本軍の将校の頭が倒れ、顔が馬のたてがみにくっついた。赤栗毛の馬のたてがみが血で染まり、その色をいつそう鮮やかにした。望遠鏡がゴロツと地面に落ちた。

馬は歩みをとめた。肩先から淡黄色の脳漿が流れていたが、馬は少しも気にせずに相変わらず地面を蹴りたてていた。

「伏せろ！」柴田曹長が驚いて身体を伏せた。

「タァ……チッ……チッ……タァ」集合のラッパが、追撃に移っていた日本兵たちを呼び戻した。

「ピシッ、ピシッ！」赤い肩章をつけた下士官が最初に側溝に二発撃ちこんだ。

柴田曹長は、遠くから毒蛇を捜しだそうとするかのように、目を皿にして地面をみつめた。

「毛吉隊長！」銃声を聞いて彼は匍匐に移っていた。

「斬れ！あの匪賊の首を！」毛吉隊長は馬から跳びおりるや、即座に命令した。「中尉を運べ……」

日本軍の一等兵が、同じ増援部隊の兵隊を連れて、赤栗毛の馬から慎重に中尉の遺体をおろした。

集合のラッパの音が消えた頃、追撃に移っていた兵隊たちも戻ってきて、一列に並びはじめた。誰の顔にも厳肅な表情が現れていた。

「隊長に報告！ 匪賊一人を捕虜にしました」赤い肩章の下士官が言った。後ろから二人の日本兵が、関二虎をかかえるようにして歩いてきた。

（第2章）

太陽が雲の隙間から幾筋もの光線を放ち、樹林に集まっていた鳥たちがあわてふためくように叫び鳴いていた。四方に飛び回っている雀も、時々大空をきらめきながら横切っていた。初夏の早朝とはいえ、気温はむしろ寒冷地のそれを示していた。

H都市の街道は、厳肅で静謐な空氣に包まれていた。歩哨を除けば通行人は見当たらない。東門付近ではすでに死体も片づけられ、ただ凝結した血だまりが残っているだけであった。一組の親子が、刀の柄や破れた軍帽などのがらくたを売っていた。

「麻袋を担ぐなんてまっぴらだ」彼はおぼつかないに銃を受け取ると、不器用に遊底を引っぱった。弾倉のなかには弾丸が一連入っていた。緊張がズッシリと心の底まで伝わり、彼は言いようのない恐怖を覚えた。彼は足をしっかりと組み、最前列の劉司令官をチラリと眺めた。

劉司令官は望遠鏡で索敵中であつた。

「靠山！お前、負傷兵と物資を護送して柳樹屯子^{リウシュトン}へゆけ。俺は関团长^{クワン}の砲撃隊と日本軍の追撃をくいとめる」彼はそう言いながら付近を見回した。

「あんたたちはあの道をゆくのか？」靠山が馬をとめた。

「急げ！俺たちは伊里哈塔^{イリハタ}へ逃げる。二手にわかれるんだ」

軍用自動車の音が、だんだんと近くに迫ってきた。誰もみな黙りこくつて、聞こえてくる音にじつと耳を澄ませた。

「抜けろ！途中朝鮮の馬賊に気をつけろよ！」そして劉司令官は最後に靠山にちよつと手を振った。

砲手たちは腰をかがめて砲身を押しながらそつと後退し、抜け道まで来ると駆け足を始めた。

自動車の音は静かになったが、代わって聞こえてきたのは、足音と銃剣などの金属音の入り混じつたものであつた。

「退却しながら反撃する！正面を避けて側面を衝け！」関二虎が郎砲手にぶつかった。

「退却しながら反撃する！正面を避けて側面を衝け！」郎砲手も同じように別の人間にぶつかった。

「パン・・・パシッ・・・」隊列の側面が撃ちはじめた。

「パシッ・・・パシ・・・」

「うッ！」郎砲手はけいれんしながら、そのまま側溝に突っ込み動かなくなつた。

「野郎！・・・」関二虎もはずみで側溝の底に転がりこんだ。

乳白色のもやが地表にたちこめていた。劉司令官のロシア馬が樹林の中に消えていった。

郎砲手は、ぼんやりした意識の中で寝返りをうった。すると猛烈な痛みが、麻痺していた感覚に走った。彼は必死に歯をくいしばったが、鉄鉈石でもかんでいるようなギシギシという音が口から漏れた。唇はひどく裂け、目は固く閉じられていた。

彼は意識が遠くなり、銃声も聞き取れなかつた。代つて別の物音が彼の目を開かせた。もやの膜を通して、日本軍の救援部隊の姿が目映った。

敵は墳墓の間を匍匐前進していた。距離は近い。その中でも赤栗毛の馬にまたがった将校は、郎砲手の激しい怒りを惹起した。彼は身体を支え起こして、周囲を見回した。そして同時に、あごを固く締め胸の激痛をこらえた。

失望した眼差しにまた喜びの色が戻ってきた。彼の口許には皮肉な笑いが漂っていた。彼は右手を前に出し、転がっているピストルをつかもうと試みた。激痛が腕を走り、手がビリビリと震えたが、やつのことをつかむと手を戻した。目を落とすと、左肩の内側の一面に血沫が飛び散ってい

「どこから？」靠山が手の中でたずなを固く握り締め、馬の頸を返した。

「東門だ」

「大先生を呼んで『八門』を開けるのはむりか」靠山は、凄味を帯びた黒く太い眉をひそめ、目をサツと三角形にした。

「夜が明けるぞ！どこでもかまわんぞ！救生門でも地獄門でもな、・・

・朝鮮咸北境の敵軍がもうすぐくるぞ」

東門を退却しながら、劉司令官は銃器の運搬に全力をあげた。誰の肩にも一丁以上の銃がぶらさがっていた。輜重隊の方は、銃器の代わりに肩に重い麻袋をしょっていた。ノッポの孫は、そのうえさらにビール一箱を背負っていた。

遠くの山峰の稜線が、わずかに赤味を帯びた朝の光の中に浮き出て、空気はひえびえとしていた。野外の平地では、すでに雀が飛来し、低くさえずっているのが見分けられた。

人々の雑談の間にサツサツという軽い足音がまじっていた。誰も彼も勝利の喜びに酔いしれ、空気を吸うことすら快適で楽しく思われた。

砲撃隊の殿が砲手であった。彼は低く頭を垂れたまま、目は関二虎の靴を見つめているようにみえたが、その実じつと余韻を味わっているのだった。彼が満足していたのも当然である。あの満州国警察の監視役の日本兵を、彼ははじめの一発で倒したのであるから。

——で、当然その日本兵のピストルも手に入ったというわけである。彼は腰にぶら下がっているピストルにちよつと目をやると、また一段と

愉快な気分になった。

「二虎よ！こいつを見ろ！」彼はピストルを抜き、手のなかに握り締めて少し振ってみた。

「ピストルか！どうして上官に差し出さないんだ？」関二虎は振り向き、気のなさそうな返事をした。

関二虎は大部分の連中がみんなピストルをどさくさにまぎれて自分の懐に入れているのを知っていた。しかし、彼は持っていなかった！小銃さえも手に入らなかった。攻撃命令が下った時、彼は臨時の輜重隊に回ったことを後悔した。

麻袋がまた彼の肩にくいこんできた。彼は砲手にさっきから持たされていた歩兵銃を返した。

——ちよつと立ち止まったばかりに、何て長いこと背負わせやがって・・。だが、この言葉はどうとう口に出せなかった。

前方の隊列から「銃をとれ」の号令がかかった。

「銃をとれ！」関二虎は振り返り砲手に伝達した。

「銃をとれ！」彼もならって後ろに伝えた。

すぐに隊列は散開し、砲手は俊敏に隊列の外に飛び出した。

「こっちへ来い！俺の歩兵銃を貸してやる」

「本当か？」関二虎が尋ねた。

砲手のその様子から、関二虎はそれが嘘でないのを知った。彼は麻袋を他の者に肩がわりしてもらおうと、浮き浮きしながら飛び出した。

した。

「早くしろ！おやじたちが荒らしおわっちまうぜ。俺たちも・・・」

「あっ！ありゃあ蔡局長の所の別嬪だぜ」軍帽を飛ばした相棒は、自分の言葉がでたらめではないのを強調して、さらに付け加えた。「本当なんだ。前においら奴らの公舎へ豚肉を届けに行つて見たことがあるんだ」

「こっちが先だ！ほっとけ！アホが」若者が催促して言った。

「お前なんか甘い汁を吸えないぞ・・・」その声の調子には、バカにされたことへの抗議が含まれていたが、弱々しかった。

彼らは手慣れた様子で軽機関銃を下ろし、町の外の無縁墓地へ担いでいった。周囲にしばらく静寂が訪れた。

無縁墓地の後方は低い林で、黒い闇が一切を呑みこみ、一筋の光も見えなかった。負傷兵たちのうめき声が低くかすかに響き、担架で運ばれているようであった。

「山！」軍帽なしの兵隊が尋ねた。

「川！」黒い影が答えた。

そこで彼は軽機関銃の台座を外し、相手の肩をさぐってゆっくりそこに下ろした。相棒の若者も銃身を渡した。

銃砲の響きが遠くではじまった。

「またおっぱじめたぞ！」彼は振り向いて仲間の体を引っぱった。

「朝鮮人の店を接收だ・・・」耳元に口を近づけた。

「銃は？」彼はそう言いつつすでに走りだしていた。

「バカ！銃がありゃあ誰が輜重隊になんか・・・」お人好しの相棒がえいだ。「朝鮮人はちよつと脅かせばOKだぜ」

二人は興奮に浸りながら東門に走った。

前方から一群の人々が押し寄せてきた。靠山はそこの中にあつて、しぶきをまいあげる高浪にも似ていた。彼の胸の前では、小さな赤毛の馬がピンと立った二つの耳をクルックルツと動かしていた。彼は上着の袖で顔を拭いた。

「輜重隊はあれを運べ！」

「どれ？」と言って、人の好い相棒が腰をぬかした。麻袋が一つまた一つ・・・目の前に投げ落とされたからだ。

「ゴム長靴、タオル、メリヤスズボン、小麦粉、石油、・・・みんなあゝ」郎砲手^{ラッパ}が現れていた。

「^{クアンアルフ}関二虎、運ぼうぜ」若者が後ろから彼を引っぱった。

「せっかくなことを考えたのに。バカバカしい目にあっちまった」関二虎はブツブツ言いながら銃を持ち麻袋を拾いあげた。

銃声はだんだん少なくなってきたが、くたびたような機関銃の音がまだ続いていた。西の街角から馬のひずめの音と群衆の叫び声が伝わってき、警笛もピーピーと鳴っていた。犬が興奮してほえかかる声が、あたり一面に響きわたっていた。極度の不安と恐怖が人々の心に重苦しくのしかかっていた。

「退却だ！」劉司令官がどなった。

断末魔の悲惨な叫びが、断続的に沸きあがった——それは側面からの射撃が、正面からの猛攻に変わったからだ。

城壁の望楼の上から、日本軍の機関銃小隊の射撃兵が一人、グンニヤリと転がり落ち、続いてまた一人落ちた。城壁の下の日軍派遣隊にたちまち混乱と動揺がおきた。

「進め……ピシッ……」叫び声の範囲が広がり、銃声もますます激しさを加えた。ただ機関銃だけは、驟雨のようなその音を止めた。

ノッポの孫は、熱くなった銃身を手でつかみ、隙に乘じて城壁の割れ目からよじ登った。

「死ね！」彼は銃床を持ち上げ、下方の鉄兜をかぶった日本兵に対し、叩きつけるように撃ちはじめた。日本兵たちはたちまち大混乱に陥った。

城門が斧で叩き割られ、破られた。兵隊たちがドツと入った。

「退却！……」

この命令が城内の守備隊に響き渡ると、全員が溝鼠のようにこそこそと逃げ出した。入れ代わりに別の一群が堰を切ったように激しくなだれこみ占拠した。劉司令官のロシア馬もその中であつた。

「靠山！若い者にムチャをさせるなよ」彼はちよつと頭を振り言葉を続けた。「忘れるな。中国人の店を荒らすなよ。俺たちの名譽のために」

一瞬沈黙が生まれ、沸き立っていた喧噪が静まった。

靠山は満足そうに一瞥をくれたが、目の底には邪悪なものがひそんでいた。彼は高らかに馬の背を叫いた。

「けがをまぬがれた野郎ども！これから俺たちの腕のみせどころだぜ」靠山の声が飄然と背後に流れていった。そのとき劉司令官は口許を綻ばせた。彼は考えていた。

——胡人（西域の人間）はやっぱり使えるわい。

「朝鮮人と日本人の店を接收しろ！」ノッポの孫の声が劉司令官の黙想を打ち破った。

「あわてるな」彼は振り返って言った。「砲撃隊の連中は俺と一緒に日本領事館にゆくぞ」

彼は拍車で馬の脇腹を蹴り、砲撃隊がすぐに後から駆け出した。バラバラになって突っ走るその姿は、まるで雨の降る直前の蟻の群れにそっくりだった。その中には朝鮮人の間屋に侵入してゆくノッポの孫の姿もあった。その場には巡察隊として一部を残した。

彼らは死体の間に埋もれている銃器を捜すのに夢中で、誰も彼もみな回りを警戒しながら獲物をあさっていた。

一人の腰紐を固く締めた、痩せて色の黒い老人が、身をかがめたままさつきからずつと死体をひっくり返していた。彼が死体の子細に調べ背中に弾丸帯が掛けられていると、辛抱強くそれをはずし、それを待つて別の一人が刀で裁断するのである。

「おい！手伝え！」城壁の望楼の上に一人の若者が現れた。彼は、軍帽を飛ばしてしまった間拔けな相棒と一緒に機関銃を下ろしはじめた

「もっとゆっくり！」城壁の割れ目にとりついてた相棒が両手を伸ば

ムツとする火薬の匂いが次々と鼻をさした。

「進め！……進め！」叫び声がまた沸きおこった。

「登れ！……」一人の小柄な兵隊が、鋸の歯の形をした城壁の割れ目をよじ登った。

「ピシッ、……ピシッ……」

「パン、……パン……」城内から銃声が響き、幾筋も空にむかつて赤い曳光弾が流れた。ついに城門がゴーツと音をたてて開かれた。

「ワアーッ」

「突撃！」靠山が命令した。

兵隊たちはメチャクチャに押しあいながら、澎湃と沸きあがる海潮の如くドツと城内に突入した。

道路脇の電灯がオレンジ色の輝きを放ち、それが兵隊たちの顔つきをいっそう獍猛にみせた。長短不揃いの破れた上着、それにくるまれた大小バラバラな体つき、しかし顔をおおっているほこりと汗と垢だけは共通していた。

「我が救国軍、歓迎！」と、北門の一人の巡査が叫んだ。

「臆病者の巡査が！ズドンとやられるぞ」と、別の一人が言った。

「すぐ……あらくれどもが東門に殺到するぞ！」靠山は胸も裂けよとばかりとなりつけ、額の青筋がピクピクとけいれんをおこした。

老弱な市民たちは、極度におそれおのき逃げ回っていた。恐怖心が彼らの正常な感覚を麻痺させていたので、目の前に兵隊をみるに及び、身を

すくめたり足をもつれさせたり、まるでたたりをおそれるかのように逃げ隠れしていた。

「こいつら、一体なにをビビッていやがる！」一人の痩せこけた兵隊が嘲笑した。

「おめらのその面が、おつかねえんだってよう……」誰かが乱暴に口をさし挟んだ。

「早く東門にゆけ！……朝鮮人間屋や日本人商社を接收しろ！」靠山は大声をあげて言った。

それはまさに鶴の一声であった。兵隊たちは、我先にと人^{ひと}気の^{いき}ない道路を必死に駆け出していったのである。

犬がひっきりなしにとびはねて鳴き、その声が騒々しさをかきたてた。鳩がいつまでも屋根の上を飛び回り、クックツと啼きながら細かい羽毛をまきちらした。

「進め……進め、早く！」靠山は横目でにらみながら人さし指にかかっている引き金をひき、連続して撃った。乗っていた赤毛馬が、耳をふるわせるほどのその音に驚いて、頸をすつと起こした。

弾丸が炸裂し、閃光を挟んでますます激しくなっていた。東門の炎は赤く不気味に天空を一面に焦がし、付近のわらの山が滝のような烈火を吹きあげ、火炎の猛烈さを競った。

「ああッ……」

「うッ……」

辺陲線上

(辺陲とは辺境の地を指す)

原作 駱賓基^{ルオビンチ}

翻訳 岡本不二明

上篇(第1章)

蒼茫としてロシアとの領界に立つ「土字碑」の後方で、冬の終わりまでずっと休養していた連中が、いまこちら側で黒々と群れひしめいていた。

まだ真夜中にならないのに、彼らは日城市を囲んで戦いの真つただ中であつた。天地が崩壊するほどの戦鬨が、ここで展開されていた。

「前に進め、……進め、……」荒々しい叫び声が、乱雑などよめきに混じって、霜のような厳しさと雹や霰のような激しきで響きわたった。

「パシッ……ピシッ……、パシッ」爆竹のような速射銃が軽快に弾道を描きだし、それが交差すると、うつすらとした灰色の煙が人々の目をおおった。

「進め!……野郎ども!」劉司令官は力一杯に叫んだ。

彼は灰色の古い軍服を着、ロシア馬の首にぴったり頭を寄せ、片手で弾丸帯をつかみながら親指で弾を出し、もう一方の手で銃を城壁の望楼に向

けて撃った。

「ピシッ、……ピシッ」城壁の機関銃が下方の群れに対して掃射された。

「靠山!手勢をつれて北門を攻めろ!急げ!」劉司令官の少し膨らんだ顔に、豆粒ほどの汗が一面に吹き出し、目がせわしげにまばたいた。

「早くしろ!野郎ども、北門へ回れ!」靠山はあえぎながらどなった。

そこで部隊の一部がさかれ、靠山の小さな赤毛馬のうしろに回された。

この別動隊は腰をかがめつつ飛ぶように走り出し、原始の本能のまま動くその姿はまるで一群の野猿にも似ていた。

大抵の人間の夜目は、こんな場合盲人のそれにも近くなるもので、他人の足の甲を踏んだり、踝を蹴つ飛ばしたりするものなのであるが、彼らに關しては、そんなことをまったく氣にとめなかった。ただ敵の残酷さに対する怒りだけが、彼らの単純な構造の頭を支配していたのである。

雲霧は漆黒のまま、一筋の星の光も見えない。

彼らが一つの林を抜けると、城内のあたりが上空の空氣と溶け合い、ぼんやりとした反射光線となってあらわれた。

「よし!繩梯子をかけて登れ!早くしろ!」靠山が銃を握ったまま弾を装填した。

「ピシッ、……ピシッ……」

兵隊たちは狂ったように射撃し、東門の銃声と共鳴しあつた。

銃弾の曳光が頭上で交差してはじけとび、煙が次第に立ち込めはじめ、